

食品分野におけるプラスチック容器包装資源循環タスクフォース（第9回）
議事要旨

1. 日時・場所：令和8年6月25日(木) 10:00～11:20
2. 農林水産省会議室（ハイブリッド形式）
3. 出席者：別紙のとおり（出席者名簿）
4. 議題：（1）「食品産業におけるプラスチック容器包装資源循環タスクフォース中間とりまとめ」について
（2）その他

5. 主な発言内容等：

（1）食品産業におけるプラスチック容器包装資源循環タスクフォース中間とりまとめについて

- 事務局から中間とりまとめ資料説明。

<意見交換>

○ 中間とりまとめの内容

- 短期間で、食品容器包装の安全機能の重要性と、再生材の量・質・コスト等の課題を実態に即した形でわかりやすく、バランスよく整理した点を高く評価。

○ 今後の取組計画に関する意見等

- 資源循環の最大の壁は、需要と供給と生活者のギャップにある。特に食品分野は一律に進めていくのは難しいからこそ、本タスクフォースにおいてサーキュラーエコノミーを進めるためのボトルネックを整理し、品目別や一次包装・二次包装を含む用途別に、再生材がいつどれだけ必要になるかという予見可能性を高めることが重要。
- 需要と供給の観点は立場によって変わる難しいポイント。新たな仕組みや世の中の大きな動きは、行政を含めて官民一体となって、新たな仲間も増やしつつ今後も進めていくべき。
- 分野別のワーキンググループの早期設置及びフォローアップを継続して実施していくことが重要。再生プラ利用に関する研究や検討を進め、品質、安全、コスト、調達に関して具体的に何ができるのかなど、定期的かつ最新の情報を発信いただきたい。その際は、先進的な取組だけでなく、俯瞰的に状況を捉えていただきたい。
- 業界内でも情報発信し会員間での理解や認識などのギャップを埋めるよう底上げしていく必要。特定の大企業だけでなく、すべての事業者が取り組んでいくことが重要。すべてのプレイヤーに対して丁寧に周知していただきたい。
- 再プラの利用促進に繋がるよう、大企業だけでなく、幅広い事業者を対象とした支援制度をお願いしたい。

- PETの水平リサイクルには苦労の積み重ねの歴史がある。関連企業が自ら手を動かして確立した除染方法が認められた後、改善を重ねながら動静脈連携を拡大し、15年たってようやく水平リサイクル率37.7%にたどり着いたところ。需要と供給のどちらが先かという議論は、両方ともはっきりしない状況の中、まずはやってみることが重要。一方、先行者の苦労は大きいので、政府からの積極的な後押しをお願いしたい。
- PPWRが8月に施行され、国際条約交渉（INC5.4）も進展の見込み。日本がしっかり対応していることを示せないと、規制の対象になる可能性もある。ベストプラクティスを提供する側に回る必要。
- 今後に向けてリサイクルのコスト分析は重要。現状、課題のイメージはこの場で共有できたが、数字がないとこの先の詳細な議論ができないため信頼性のある精緻なコスト分析が必要。また、調査は一度だけでなく、ブラッシュアップしていくことが重要。
- あるべき姿を描くためにも、品目別の再生材利用の数値目標（案）と価格差支援の考え方（案）を、2026年度内を目標に示し、より具体的なアクションプランに繋げるための議論が必要。
- 数値目標と価格差支援について言及があったが、数値目標についてはハードルが高いため、同じ時間軸で検討するのではなく、先進的に取り組む企業に対する後押しとなる価格差支援について、特に食品分野に絞った形で先行してはどうか。

（２）その他

○ 今後のタスクフォーススケジュール等

- 年内を目途に、農水省で調査している報告と先行的な取組事例紹介等を行い、情報発信の場を通じて、新たなメンバーやワーキンググループの組成に取り組んでいきたい。

（以上）